西川裕子・荻野美保〔共同研究〕『男性論』

第一章　寄せ場の男たち――会社・結婚なしの生活者――　トム・ギル

はじめに

現代日本において都市生活を送るほとんどの男性は二つの契約関係に縛られている。それは「結婚」と「会社」である。結婚の契約には（結婚届にこそ書いてないが）、物質的な面と精神的な面がある。物質的な面では男は妻に金を与え、衣食住、セックス、生活の場をもらう。精神的には「愛情」や「忠誠」と交換する。結婚という長い付き合いを安定的で気分が言いと感じることもあれば、息苦しい、責任が思いと感じることもある。

そして会社からは、物質的には労働の対価として金をもらう。精神的には「忠誠」を提供し、「安定性」をもらう。日本の会社、少なくとも日本人論の多くに取り上げられる大企業では、他の資本主義国の場合よりも契約の続行が保証され、抜群の安定性を誇ってきた。しかしこれもまた、長い付き合いであり、会社と個人の間の力のアンバランスを感じたり、会社のために失った自由が気になることもある。

最近「単身赴任」や「過労死」が頻繁に新聞の見出しに出ており、会社と会社員の関係を問題とする視点がほぼ決り文句になったと言っても過言ではなかろう。逆に、平成不況の時代になり、今までのような相互の信頼関係は、会社に有利な場合しか存続しないと痛感する男たちも少なくないはずである。

この二つの長い付き合いを嫌がるのはもちろん男だけではない。だが女性の場合、男尊女卑の社会ではなかなか社長になるのは難しく、それゆえ「会社」から「結婚」に逃げるという手がある。逆に結婚で会社を辞めざるを得ない女性も少なくない。男性だと、安定性と不自由性の二つは組み込まれてワンセットになっていることが多い。

ここで紹介する男たちは「結婚」と「会社」から離れている。「終身雇用」の代わりに「一日契約」。「五〇年間の結婚生活」の代わりに「売笑婦と二〇分」。ミニマムな人間関係である。その主流からの離れ方は果たして「逃げた」という意味なのか、それとも「追い出された」のか――これは実に微妙な問題である。現実はさまざまであり、その現実を説明・正当化・曲解するナラティブ（語り）もまたさまざまである。この男たちが集まるとき、彼らが置かれている状況をどう解釈すればいいのかは大きなテーマでもある。

一　「寄せ場」・「寄り場」1

寄せ場は、文字通り、「人々を寄せる場所」である。その人々とは日雇労働者である。日雇労働者は、一週間や一ヶ月単位で働くこともあるが、文字通り一日

契約で働くこともある。
日本の主な寄せ場は大阪・釜ヶ崎、東京・山谷、横浜・寿町、名古屋・笹島、川崎・ハラッパ、福岡・築港である。「寄せ場」と「ドヤ街」という二つの表現は不注意に使われることが多いが、同一のものではない。「ドヤ街」は「ドヤ」2 という安いホテルが集中する場所である。釜ヶ崎、山谷と寿町の場合、寄せ場（労働市場）とドヤ街（簡易宿泊所の集中地帯）という両機能が一緒になっているが、他の、より小規模な寄せ場は単なる労働市場で、ドヤ街ではない。労働省の統計によると釜ヶ崎には約二万一〇〇〇人、山谷には約九〇〇〇人、寿町には約六〇〇〇人の日雇労働者が集まっているとされる。名古屋の笹島で仕事を探す日雇労働者は約三〇〇〇人だとされる。
日本全国の日雇失業保険の手帳（「白手帳」）を持つ人口は五万人弱。その九九％は男性である。いろいろな理由で白手帳を持っていない日雇もいるが、彼らを入れると日本全国の寄せ場労働者は一〇万人程度であろう。
「ドヤ街」は差別用語とされがちだが、日雇労働者が頻繁に使う言葉である。社会学者が割合好む「寄せ場」という言葉は、彼らはあまり使わない。むしろ地域の略称を使う。例えば釜ヶ崎は「カマ」、山谷は「ヤマ」、寿町は（横浜の）「ハマ」と呼ばれる。こういう風に、この「三大ドヤ街」の連帯が押韻で表現される。また「寄せ場」という言葉と別に、「寄り場」と呼ぶ労働者も少なくない。大事な違いである。日雇労働者は果たして、能動的に「寄る」ものなのか、それとも受動的に「寄せられる」ものなのか？この能動・受動のテーマは、日雇労働者の語りでよく出てくるアイデンティティ作りにあたって大事な要素である。
寄せ場・寄り場問題は、日雇ではない人の寄せ場の解釈にも出てくる。例えば、ある寿町の運動家は寿を「姥捨て山」と描写した。だが、ある横浜の警官は同じ寿を「駆け込み寺」と呼んだ。前者は要らないものが捨てられる場所・後者はいじめられるものが逃げ込む場所という意味である。さらに示唆的なことに、男の労働者の場である寄せ場を。「女」に適用される観念で分析するという共通点がある（江戸時代には、尼寺に駆け込んで三年過ぎると結婚が自動的に解消できた）。このように、周辺的な男を女のように語ることは少なくないのである。これは日雇労働者が男らしくないという意味ではなく、「主流＝男」と観念した場合の「周辺＝女」のイメージからくる。
では、どういう男が寄せ場にいるのだろうか。わたしが一九九三年から一九九五年まで調査した横浜・寿町を見ると、三つの特徴がある。3
（一）田舎の出身者が多い。
寿は横浜の真中にあるが、寿日労（寿日雇労働者組合）の一九九二年の調査結果によると、東京都と神奈川県の出身者はそこで活動する日雇の二一％しかいない。東北プラス北海道出身者は二二％。九州出身者は一二％。もちろん地方の

都道府県にも大都市があるが、私のインフォーマントたちには農村・漁村の出身者が多かった。

（二）平均年齢が五〇－五五歳あたりである。

寿日労の統計によると一九七五年から一九九一年までの間に、寿町の日雇の平均年齢は三八・六歳から四九・一歳に上がった。私のインフォーマントで年齢を教えてくれた人は四五人いたが、一九九五年一月一日現在、彼らの平均年齢は五三・二歳であった。それ以来高齢化がさらに進んでいると思われる。

（三）九割以上は単身男性である。

私とであった一五八人の日雇のうち、「女房と暮らしている」と答えたのは六人だけであった。一生独身の者もいれば離婚者やヤモメもいるが、それぞれの割合は推測するしかない。彼らの半分ぐらいが結婚の経験者だと見られるが、あくまでも推測である。

二　「総領の甚六」

データの不足から前述の三点ほどには確言はできないが、寄せ場の男たちには「長男」と「末っ子」が割合多く、「中間の子」が少ないという印象も、私のデータから出てくる。平均年齢と出身地から考えると、大家族、五人きょうだい程度の家族構成が多いはずで、家族構成のことを話してくれた一〇二人の男たちは（本人を含めて）平均四・七五人のきょうだいだった 4。なお、彼らの場合、長男：中間の子：末っ子の割合はほぼ四対二対四で、長男も末っ子も無作為抽出標本の比率を上回る 5。

末っ子というと、伝統的な家制度では家を出ることが前提だったから寄せ場に入るのは不思議ではない.しかし長男は家を相続するから、寄せ場にはあまりいないと私は思っていた。男は「世帯主」、「大黒柱」、「責任者」であるとすれば、長男は「スーパー男」であるはずだからだ。しかし、かなりの割合で長男が寄せ場にいたのである。日雇労働者自身はこの現象を説明するとき（一）心理的な理由と、（二）社会的・歴史的な理由を持ち出した。

（一）長男は幼いときから特別な扱いを受け、甘えん坊になりがちである。次男が生まれる前は一人で親の愛を（場合によっては姉と分けても）独占する。将来は家を相続するということが早い段階から分かるので、あまり未来のことを考えずに、のんきになってしまう。だが物事がうまくいかない場合、長男の「特権」が「負担」に変化することもある。戦時中生まれの男の場合、それはよくあったはずだ。家に残っても飯を食えないとき、他の兄弟ほど心の準備ができていない。大都市に出たとしても仕事がうまくいかず、寄せ場で終わってしまう。あるいは、「第二のお父さん」（実父が戦死して文字通りの第二の父、すなわち父親代わり）という役割をなかなか果たせず、その責任から逃れるた

めに寄せ場までくるという話もある。

三　シゲル

寄せ場にいることを恥と考える男と考えない男の両方がいる。長男は前者のほうが多い。その一人（シゲル）はこう語った。

「三九歳です。宮城県の小さな漁村生まれ.三人兄弟の長男ということで、家に残って家を支えるはずだったが、僕はそれに向いていなかった。「総領の甚六」ということかな。幸い、弟の一人はしっかりしている。彼は今家族の釣り舟に乗っている.網一人の弟は航空自衛隊にいます。二人とも大丈夫だよ。」

「僕はバーテンダーだった。大きな国際的なホテルで働くのが夢だった。自分で言うのは可笑しいけれどカクテルは相当上手だよ。一回、日本全国カクテルコンテストの埼玉県大会で二位になった。でも有名なホテルだときれいな字を書かなければならないし、外国語も必要だよ。結局、ダメだった。二九歳で、ラブホテルの最上階の回るレストランで働いていた。丘陵は月二〇万円、ボーナスなし。しかも、毎晩午前三時まで働いて、タクシー大は自己負担」。

「結婚はしていたが、女房はこの生活に飽きて、出て行っちゃった、八歳の息子を連れてね。息子はもう十八歳になっているが、この一〇年間は会っていない。元妻は宮城の実家の近くに住んでいる。故郷の友達から聞いた話だと、時々彼女は僕の両親にお金を求めることがある。直接連絡はしない。保守的なところだし、両親を困らせたくない」。

「女房が行っちゃった後、バーテンを辞めて山谷に行った。鉄筋工になった。一日一万八〇〇〇円ぐらいということで、月二〇日分の仕事を取れば三六万だ。バーテンの時よりずっといいんだよ。できれば、一日契約より一〇日間や十五日間の契約が好き。一日単位で働くとなんとなくお金を全部その日に使っちゃう。でも建設会社の社員などにはなりたくない。ボスにこき使われるのが嫌だし、お金もレギュラーの方が悪いんだよ。計算したところ、会社の鉄筋工は平均一日一万六〇〇〇円に当たる。しかも、税金、保証金など払わなきゃならないでしょう。日雇はたいがいそういうコストを避けられる」。

「その一方、仕事がないとき、彼らはまだ収入があるのに、僕たちはないですね。最近は月十五日間が精々で、お金がない。青カン（外で寝ること）さえ二回ほどやっている。たしかに不景気になると日雇の魅力は見当たらないけどね。困ったことにこの自由な生活に一旦なれてしまうと、なか変われないんだよ」。

「とにかく、人は本当に自分に適した職業を選ぶとは思わない。日雇いは僕の運命だと思う。仏教を信じている。私の家族はもう、十五世代曹洞宗に入っているんだ。このままじゃ、実家には帰れないが、死んだら多分両親はお墓に入れてくれると思う。生きている間実家に帰ったら、親が近所の人に怒られるが、

死んでからは逆にお墓にいれないとおかしく思われるでしょう」。
しかしその後、ある日シゲルはついに母に電話した。意外と温かい反応だった。従兄弟結婚式に招待された。一ヶ月の飯場の仕事で稼いだ十五万円を全額、スーツとお祝い、新幹線の切符に使って出席した。誰も彼を軽視しなかった。久しぶりに親戚と会えて、とてもよかったと言っていた。ただ、新しい問題ができた。また付き合うことになったので、当然、親や兄弟は彼の住所を教えてもらいたがった。でもシゲルには住所がなかった。あちこちのドヤや飯場の寮で寝ていたからだ。その事実を、両親に話していなかった。「小さな建設会社の作業員」だとごまかしていた。連絡は自分からの電話だけであった。
「ずっと言い訳をしているからね。両親はヤクザか何かやっていると考えているに違いない」。
「それなら、ヤクザだと勘違いされるより、日雇である事実を伝えた方がいいじゃない？」
「そうかもしれないけどねぇ……」6
シゲルのように、「帰れない」と思っても実際には「帰れる」寄せ場の男がかなりいると思われる。労働センターの看板には「たずねびと」のポスターがたくさん張ってある。「松本道彦（五六歳）という方がいたらセンターに連絡してください。お母さんが探しています」というようなものである。ドヤの帳簿さん（フロント係り）に聞くと、古い写真を持って、この親戚の男について心当たりがないかと聞く客が割合よくくるという。

四　就労作戦
日雇労働者は働く前に、まず仕事を見つけねばならない。寄せ場では、フォーマルとインフォーマルな仕事の詐害肩があるが、とりあえず三つに分けてみる。青空市場、職安、その他である。
①青空市場
中心は、青空市場である。朝早く（午前五時ごろは普通）、寄せ場の道路に出て、「手配師」という仕事の仲介人から仕事をもらう。手配師は路上で日雇労働者と交渉をする。手配師というのは実にさまざまである。ヤクザ、またはヤクザに雇われているもの。大手企業の社員でその企業専属の労働者仲介人。一つあるいは複数の会社と契約し、または特別な人間関係を持つ独立の労働仲介人、等々。
手配師は、さまざさまな形で紹介料を取る。デズラ（一日の賃金）の三割程度の紹介料は普通だと寄せ場では言われている。これは「ピンハネ」といって非難されるが、実際に合法的な人材派遣業も三〇％または三五％の紹介料を取るのは決して珍しくない。違うのは文化的な「包み」だけである。ヤクザ系では

ない手配師の場合、ヤクザに月数十万円のショバ代を払わなくてはいけないのが普通である。
日雇と手配師の人間関係は経済的要因に大いに影響される。日雇いは俗語で「タチンボ」と呼ばれることがあるが、不景気のとき日雇は「アルキンボ」にもなる。つまり、仕事が少ないとき、慌てて手配師を探し回るのである。反対に労働力不足のときは、手配師のほうが焦って労働者を探し、現場に行くように説得する。
②職安
もうひつとの就職方法は「職安」である。釜ヶ崎、山谷と寿町にはそれぞれ二ヶ所の職安がある。一つは中央政府（労働省）の施設で、もう一つは県・市の外郭団体が運営する。この仕組みは決して労働者に有利ではない。例えば山谷の場合、山谷労働センター（地方の職安）は午前六時半開業であり、玉姫労働安定所（労働省の職安）はそこから歩いて一〇分の距離で六時四五分に開業する。センターであぶれた場合、走って安定所に行かなければ間に合わないということである。職安を一本化するほうがよほど合理的であろう。こうした二重職安制度は中央と地方の間の摩擦から生まれるというのが私の印象だが、いまだに確認ができていない。
外から見ればこの二つの職安はあまり変らないが、仕事の配付制度は全然違う。センターは資本主義の自由競争の鑑である。仕事の数がそもそも少ない（例えば、二〇件程度）ので、最初に手を出す人が仕事をもらう。一秒でも遅れると、あぶれてしまう。建物の前にシャッターがあり、その前で男たちがラグビーのスクラムの形になって押し合う。シャッターがちょうど六時半に上がる。わずか五〇センチしか開いていない段階で、男たちが一種のリンボーダンスを演じて下にもぐり込む。そして必死に窓口まで走り込む。ラグビー、リンボー、スプリント……山谷の労働者の基本的ボディーテクニックである。
寿の場合、労働センターのシャッターは二枚ある。午前五時四五分に外側のシャッターが上がり、男たちは建物の内か外かが微妙な、境界のスペースに入る。六時十五分になると内側のシャッターが上がり、やっと仕事の看板が見え、窓口で申請できる。平成不況で、仕事はやはり非常に少ないし、競争はものすごく激しい。午前五時前から男たちが外側のシャッターの前にあつまり、ダンボールを敷いて、イスラム教徒が敷物の上にひざまずいて祈るように、仕事のチャンスを必至に待つ。外側のシャッターが上がると、押し合いながら内側のシャッターまで走って、また三〇分待つ。それが上がるとすぐ登録カードを窓口に打ち込み、無関心な顔をしている事務員に、数少ない仕事の看板番号を大声で言って、その仕事をものにする。「長い手が勝つ」とよく言われる。
加藤（一九九一、三〇四頁）は、朝一番のこの就労競争の時間帯に関してこう

書いている。「労働力商品の販売のたびごとに一定時間を消費せざるを得ないということは日雇労働者の就労を不規則にし、さらに日雇労働者の拘束時間を長時間にすることによって、かれの労働をより苦痛の多いものにい、かくしてかれの存在を一層不安定なものにすると考えられる」。
まさにその通りだが、同時に忘れていけないのは、朝一番は寄せ場の社交的な時間帯でもあることである。センター前の就労スクラムから一歩下がってみるとちょっと違う印象になる。押し合いに参加していない、周辺から見ている男たちもいる。仕事はもう決まりで余裕がある男たち。競争に加わっても勝ち目がないとあきらめている男たち。やる気がないけれどちょっと見ようかなという男たち。怪我や病気で働けない男たちでさえ、表に出ている。毎朝の就労活動は経済的な意味以外に、社会的な意味も持つ。小さな祭りという感じもあり、そのとき起きていないと気が済まない人もいる。激しい競争の場に、男同士のコミュニティーも存在する。
センターが自由競争の場であるなら、安定所（労働者の職安）はむしろ社会主義的な環境である。仕事は輪番制度で配布される。安定所を使うには日雇労働者の手帳（いわゆる「白手帳」）が必要である。手帳には番号が書いてあって、昨日の最後の仕事を取った者の次の番号から仕事の配布が始まる。なるべく公平な割り当て方という意図である。ところが、この平成大不況では、仕事はあまりにも少ないので、特別な技術を持たない限り月一、二回しか仕事を望めないわけである。競争がなく、仕事をとる可能性も少ない。男たちは急がずに、ダラダラと窓口の前で時間をつぶす。最後の仕事が決まったら、あぶれた人はポンと白手帳を窓口の受け皿に置いて、去る。手帳に印紙が充分貼ってあれば、二時間後、あぶれ手当て七五〇〇円がもらえる。
③その他
寄せ場では手配市と職安を通す以外にも、いくつもの就職作戦が見られる。
どこかの建設事業者の親方と仲良くなって、手配師を使わずに、半定期的に直接現場に行く労働者がいる。これは「直行」と呼ばれる。こういうコネが多数ある一方で、朝、電話で仕事がどこにあるかを確かめるために携帯電話を持つ、「エリート日雇労働者」もいる。
スポーツ新聞などに出る就職欄を読んで応募するケースもある。寄せ場にはある程度の団結があり、労働組合もあり、低賃金を糾弾する運動がある。しかし、新聞で仕事を探すのは主に一匹狼的な男で、賃金や労働条件にこだわる余裕がない。ということで「新聞の手配」は寄せ場の労組と運動家によって問題視されることが多い。
地位の低い労働者Ａは顔の広い労働者Ｂと仲良くなって、Ｂに現場に連れていってもらって、採用者に推薦してもらうこともある。この場合、労働者Ｂは労

働者Aのパトロンになる。数人の労働者のパトロンになると、少しずつ「親方」に変身する。これは特に寿町の外国人労働者の間に見られる現象である。日本語の能力や生活のノウハウを持つ労働者がパトロンの役を果たすことが多い。就労の方法はさまざまであり、就労作戦は個人の性格、能力と自信を微妙に反映する。

五　刹那主義

日雇労働者の大半は、シゲルと違って「有期契約」より「一日契約」の方を好むと思われる。寿町の労働センターでは、平成大不況に入ってから、看板にでる一日契約の成立の割合がほぼ一〇〇%になってきたが、有期契約は八〇%程度。つまり、この大変な不況の中でも、有期契約が拒否されることは珍しくない7。その理由はさまざまである。有期契約だと飯場に入らなければいけないことが多く、場合によってその飯場は「タコ部屋」、またはそれに準ずる「平タコ」という悪い評判がある。あるいは、身体が弱くなって、一ヶ月連続的に働けない労働者も少なくない。だが同時に、「一日働いて、その日の銭をもらう」という日雇労働者の伝統的な原則も生きているのではないか。飯場の経営者はなるべく労働者への支払いを延ばす。契約が終わるまで待たされるのが普通であり、支払延滞も珍しくない。しかし逆に、有期契約は大きなメリットもある。より安定した収入を確保できるし、場合によって食事が出る。そして飯場に泊まっていると簡易宿泊所の部屋代を払わなくてすむ。にもかかわらず、むしろ一日契約で働きたがる労働者たちが大半であろう。

もらったデズラ（一日の賃金）を貯金に回す男もいるが、その金が無くなるまで使って、なくなったらまた仕事を探す男が大半だろう。こうした生活の様式は他の工業国の不安定労働者の間にも見られる。戦前の文献だが、Parker（1920, pp. 78-79）と Williams（1912, pp.31-32）はそれぞれ、アメリカの臨時雇労働者とイギリスのリバプール市の港湾労働について同様の指摘をしている。

衣食住に使った後の残った金の使い方はいろいろである。寄せ場には小人数のウエイトレス・年配の帳場さん・ママさん以外に女性がいないので、デートの相手はほとんどいないが、売春街は遠くない。山谷と釜ヶ崎はそれぞれ吉原と飛田の隣で、寿は日の出町から歩いて二〇分である。だが日雇の常識的計算によると「八時間の肉体労働＝二〇分の肉体的遊び」であり、鳶職や大工のようなエリートタイプ以外はめったに行けない。むしろ飲酒とギャンブルが主な娯楽方法である。いずれも社交的な行為である。

焚火の周りに座り、ボトルを回し飲みする。仲間と一緒に「連れション」もする。ギャンブルは何でもありだが、中心は競馬・競輪・競艇。ぬくぬくした飲みやで仲間と馬の調子やオッズ（配当倍率）を話し合いながら、賭けの作戦を

決める。だがもちろん、この遊びは中毒になるリスクが多角、賃金を早く使い切る可能性も高い。
さて、日雇労働者が「宵越しの金は持たない」というとき、これは本物の「オルターナティブ・ライフスタイル」と考えていいのか？　それとも、個人が自分の貧困を正当化する、一種の精神的な「ごまかし」だろうか？
多分両方の要素が微妙に混ざっているのではないか。貧困層に入ってしまった日雇労働者の場合、オーウェルが貧困の生活をして自分の中にみつけた時間の意識が彼らにもあるだろう。「貧乏には……大きな救いがあることを発見するのだ。将来というものが消えてしまうのである。金がないほど心配も少ないというのは、たしかにある程度まで真理である……「あしたは餓死するだろうな——えらいことだな」とぼんやり考えはする。だがそれっきり、また別なことで気がまぎれてしまうのだ」（「パリ・ロンドン放浪記」邦訳一九八九年）。
当局からみれば、刹那主義は大きな問題である。「宵越しの金は持たない」を美徳にする者は、貯金も保険も持たない。そして不景気になるとすぐ貧困に落ちてしまう。「土方殺すにゃ刃物は要らぬ、雨の三日も降れば良い」。このことわざもよく寄せ場で聞くのだが、当局は（少なくとも建前としては）そういう死に方を防止しなければならない。だから。貯金の習慣を普及させるために、福祉当局は寿町に特別な銀行を設けている。日雇専用である。午後八時まで開いているから、一日の仕事が終わったら、テズラの一部を貯金できる。しかし、その銀行の事務員の話によると、五時に一万円を入金しても、八時までに三回も四回も銀行にもどって、全額まで引き落とすことも少なくない。こういうことよくあるから、東京山谷にある同様の日雇専用銀行では一日一回しか取引が許されない。そういう厳しい規制がないということは寿の銀行の自慢である。
刹那主義を問題視するのは当局だけではない。寄せ場にはキリスト教のボランティアが必ずいて、彼らの目で見ると、時間には宗教的な面もある。この世での将来だけでなく、来世も大事にしなくてはいけない。そこで彼らボランティアは、体の健康を大事にするように炊き出しを行ったり、野宿労働者に毛布を配ったりする。魂の健康のために、キリスト教の伝導を行う。欧米の救世軍のように、賛美歌を歌わせてから食事を与えるというキリスト教団体は山谷や寿町でも見られる。イギリスでこの習慣は、"sing for your supper"　（歌って夕飯にありつく）と呼ばれているが、日本語版は「アーメンでラーメン」である。ところが一月のある朝の五時半、こういう出会いもあった。
「朝日屋（店の名前）の前で痩せた小さな男が焼酎を飲んでいた。糖尿病で、心臓が弱いと彼が言った。「気を付けた方がいいよ」と私。「もう六〇歳だから死んでもいい。ずっとカソリックだから天国へ行きます。毎週日曜日、ちゃんと教会へ行っています。ぶどう酒とパンくれるよ。こういう風に——」と言っ

て、舌を出して、聖餐をいただく真似をする」（フィールドノート、一九九四年一月五日）。
というわけで、ローマン・カソリック教といういかにも思弁学的な未来を強調する思想さえ刹那主義を正当化する手段になる。多くの日雇労働者は「労働に対する報酬をなるべく早く手に入れて、使う」といってもいいと私は思う。キーワードは「現場」と「現金」であえる。「現場」という実際の場所で、意味のある、実用的な仕事をする。その報酬を「今、現在」、現金でもらって、すぐ「現物」に変えて楽しむ。

六　明日はくる

先の例に見られるように、短期の刹那主義は長期の運命主義につながる。貯金をせずに賃金を仲間と飲む。これはかっこいい。市民の価値観を見事に馬鹿にする生活ぶりである。「男らしい」とも言えるかもしれない。だが、景気が悪くなればどうする？　年をとったらどうする？「明日はこない」という生活をしても、明日は必ずくる。
若いうち、日雇労働者はサラリーマンとあまり変らない収入が得られる。横浜周辺だと上方は一日一万二〇〇〇円—一万五〇〇〇円を取れる。技術のある大工や鳶職なら、景気のいいときは、一日三万円も取れる。そして働かなくても、あぶれ手当で七五〇〇円もらう。一ヶ月十四日間働けば、デズラ一万二〇〇〇円で「14 x 12,000 + 13x7,500 =265,500」つまり二六万五五〇〇円、ドヤ代は一泊一〇〇〇円—二〇〇〇円なので、結構いい生活ができる。そして、酒を飲む人もいれば、本を読んだり、外国語を学んだり、旅行に行ったり、いろいろの楽しみ方がある。

しかし、日雇の主な売り物は肉体的な「力」である。長年辛い建設や港湾労働をすると、しだいにその力を失ってしまう。サラリーマンは毎年丘陵が少しずつ上がるが、日雇の収入は確実に減る。そして遅かれ早かれ、崖から落ちてしまうのである。
白手帳を持つと日雇い失業保険に入れる。二ヵ月に二六日間以上働くと、その次の一ヶ月は、平日で仕事が取れない日には、一日七五〇〇円のあぶれ手当てをもらえる。この制度にも、推進と管理が微妙に混じり合っている。白手帳に貼る印紙は一七六円で非常に安い。法律では雇用主と労働者は印紙代の負担を半々の八八円に分けるが、一万円のデズラから八八円を引くけちはあまり見当たらない。大事なのは一七六円と七五〇〇円の巨大な差額である。つまり、政府が日雇失業制度の費用の約九八％を払っているという計算になる。
しかしこれは「福祉」ではない。月一三回仕事を取れる労働者はその恩恵をも

らう。それが出来ない労働者は一銭ももらわない。日雇労働者のキャリアを見れば、少しずつ年をとって、身体が弱くなって、仕事が出来なくなる。そしてある日、保険をもらう資格を失って、収入が劇的に減る。「13 x 12,000 + 0 =156,000」つまり十五万六〇〇〇円、こうして失業から貧困、貧困から野宿、野宿から野垂れ死にという課程が一気に加速する。建設業と港湾に必要な労働力を保証し、要らない労働力を早急に処分するという制度である。

この仕組みにまき込まれている刹那主義の日雇には、困難な選択がある。刹那主義の意味を認めて、刹那主義的にこの世を去るか、それとも軽視してきた「国家」に頭を下げて、福祉を求めるか。

生活保護を求めるより路上で死んだほうがましという人は実際にいる。働かずに、受動的に「もらう」のは嫌い。むしろ最後まで独立で生きていく。しかしそうした態度では日雇労組が困る。「基本的な人権を求めて戦う」といって、受動的に「もらう」のを能動的に「取りに行く」に書き換える。寄せあの運動家のスローガンや本のタイトルを見ると、能動的な運動家が受動的な労働者を叱るというニュアンスが感じられる――「やられたらやりかえせ」（釜共闘他　一九七四）、「黙って野たれ死ぬな」（船本　一九八五）等。

一方、「福祉」は「自然の富」（"natural abundance" ＝自由に使ってよい天然資源）と見なす日雇もいる。最近の論文が指摘しているように、周辺的な人たちの中には、「労働」を拒否し、福祉を「自然の富」として生活に利用するものがいる（Day 1999）。生活保護はもちろん厳密な定義では自然の富ではないが、狩猟採集民の環境に動物や植物があるように、ポストモダンの都市環境にも、資源として日雇い労働、失業保険制度、そして生活保護が存在する。仕事からあまりにも疎外されているので、働くことは「収入源」として以外の価値はない。そして生活保護はもう一つの収入源に過ぎず、それを利用するのは当たり前なのである（Gill 1999）。

生活保護を申し込んでも拒否されてしまうケースが多い。拒否される理由は主に二つある。「住民票がない」、つまり恒常的な住所がないこと、そして「特に病気ではないので仕事ができるはず」というものである。いずれも法律的な根拠はなく、日本国憲法の第二五条で定められている「すべて国民は健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する」を無視しているとも指摘される。これは「制度」の側からの、「制度を馬鹿にした男たち」に対する仕返しである。

ただし、都市によって生活保護法の解釈は異なる。東京と大阪では、ドヤ住まいは「しっかりした住所」として認められないし、医者の病気証明書がなければ生活保護はなかなか認められない。あるいは六五歳以上でなければなかなか認められない。横浜は比較的進歩的な態度だし、寿日労（寿日雇労働者組合）は生活保護需給の運動に力を入れてきたということもあり、近年生活保護を受

ける元日雇が増えてきた。横浜市は寿在住でない生活保護受給者に住宅を斡旋する課程で、彼らを寿のドヤに入れることもあり、現在ドヤの部屋は半数以上が生活保護者によって占められ、現役の日雇が部屋を取れないことが多い。対照的に山谷と釜ヶ崎のドヤはがらがらで大勢の日雇は野宿しているのである。

七　キミツ

シゲルが寄せ場の社会学者なら、一九九三年から九五年まで私と付き合ったキミツさんは、寄せ場の代表的な哲学者である。

本人の話によると、キミツは一九四一年、熊本県、阿蘇山の近くに生まれた。暮らし向きのよい銀行員の一家の長男であった。しかし戦争のせいで、父は仕事を失って、戦後になっても家族の経済力は二度と戻らず、キミツは高等学校に行けなかった。二、三年間陸上自衛隊でトラックの運転に従事したが、若い頃から酒が好きで「事故を起こさないうちに」やめた。その後小さな建設会社の作業員になった。ここも人間関係がうまくいかずに，結局、やめたか首になったかして、とにかく終わった。そして四半世紀、日雇い労働をやった。

「無責任な長男」は実家に見捨てられた。この二〇年以上、連絡なし。それ以後に家族と会ったのは、父親のお葬式のときだった。「弟と従兄弟は俺をぶん殴った。「この野郎！横浜に帰れ！」お母さんだけ、守ってくれた」。なのに、今では、お母さんが生きているか死んでいるかも分からない。妹は幼稚園の先生で熊本に残った。弟の一人が大阪に、もう一人が「関西のどこか」にいる。「バラバラだ！家族の内戦だ！（ヒステリーっぽい大笑い）。でも、ここ（寿）は、俺にとっていい所だ。俺の正しい居場所だ」。一生、独身である。

キミツは建設（彼のいう「穴掘り」）より、港湾の荷役勤務の方が好きである。海のロマンである。海外には行ったことはないが、遠い国のエキゾチックな文化は魅力的だと言う。港湾で外国人船員と接触し、拙くない英語を身につけてきた。他の外国語も挨拶程度なら話せる。長年第二大丸荘というドヤに暮らし、部屋はインテリ本の山でほとんど動けないくらいである。そのど真ん中でキミツはラジオで大好きなジャズを聴きながら，何時間も本を読んでいた。ギターを弾くこともあった。私が人類学をやっていると分かると、「マリノフスキー系の機能主義者ですか？　それとも、レヴィ＝ストロースの構造主義の方ですか？」と聞いた。

キミツには彼ならではの二つの特徴があった。その一つは寛容さである。職安の押し合いに負けてあぶれてしまっても、「皆同じ状況だからしょうがない」。私を自分の部屋に入れてくれて、在日韓国人の帳場さんに「客はダメ！」と叱られても、彼は「日本の朝鮮半島への帝国主義的侵略のせいで（日本人に）辛く当たるんだ」。そして他の日雇と違って、手配師を弾劾することはしなかった。

「俺たちに仕事を提供してくれるから、いいじゃないか」。ヤクザのことさえ、「ただ仕事をやっているだけ」。自由を愛し、労働組合や運動家に対し関心はなかった。彼の「団結」の対象には、手配師やヤクザといった、日雇の階級の敵のほとんどが含まれてさえいた。
もう一つの特徴は被害妄想であった。特定の個人を悪く考えることはまずなかったが、「組織」、「当局」、「行政」などを非常に疑わしく見ていた。
ある日、労働センターの雨で腕を振りまわして、英語で「エスピオナージ！」（スパイ活動）と叫んでいるキミツを見つけた。「サボタージュ」のつもりだった。何日間も仕事を取れなかったため、センターは彼を狙ってわざと仕事を与えなかったと思い込んでいたのである。
哲学のレベルでは、「人間」は「社会」に勝てないとするデュルケム的な色彩が強かった。ある日、寿町のアポロ喫茶店で、キミツはハイゼンバーグの不確定性原理を私に説明してくれた。原子構成粒子が電磁気の流れによって測れない軌道に流されていると同様、人間は「社会の流れ」によって無理やり流されてしまう。ナチのユダヤ人虐殺に対し病的なほど深い関心を持って、寿のあちこちの壁に、ナチの強制収容所の警備兵の精密な漫画を画いていた。私と「シンドラーのリスト」を映画館で観てから、その話を語り続けて飽きることがなかった。寿町も一種の強制収容所だというのである。ただ、皮肉なことに、「捕虜」、つまり日雇労働者は、その事実をさっぱり意識していなかった。
自分の仕事を「重労働……存在自体への罰」と描写し、酔っ払って大笑いした。彼は本物の実存主義のヒーローだと、私は思った。結婚や会社の契約なしで生きていて、代わりに自分の運命と契約を結んでいるという印象であった。
キミツの平均デズラは一万二〇〇〇円だった。ドヤ代は一五〇〇円で，焼酎代はほぼ同額。馬刺しが好物だったが、日常の食べ物はご飯と漬物で充分だった。「車はガソリンで動く。俺は焼酎で動く」。たまには競馬に一〇〇〇円札を費やすことがあったが、普段の仕事の日は収入一万二〇〇〇円，出費五〇〇〇円で七〇〇〇円の黒字のはずなのに、「次の朝起きたら、どうした訳か千円札は一，二枚しか残っていない。この不思議は今までに解けていない」と言っていた。
キミツはドヤ代の支払いが数日は必ず遅れていたが、長年同じ部屋に住んでいたので，帳場さんはこれを許していた。しかしキミツは年を取って，段々仕事が出来なくなっていた。生活ぶりはかつかつで、時々二〇〇円程度の交通費がなく、数キロ離れた現場まで歩いていた。あと二、三年で野宿という感じだった。本人はこう言う。「腎臓はダメだし、六〇歳で死ぬ。それはそれでいい。いい人生は年の数で決めるんじゃない。ポイントは中身なのだ」。

おわりに

この数年間、寄せ場の高齢化が激しいペースで進むと同時に、日本の失業率がどんどん上がり、「自由労働者」から「ホームレス」への変化がいっそう速くなってきた。最近では失業率四・九%、野宿者は大阪だけで八五〇〇人という恐ろしい数字が出ている。その野宿者のほとんどは男である。日本の社会では、女はホームレスにさせないという常識がある。男は五体満足でさえあれば、仕事を取れないわけがないという、高度成長時代の常識もあり、母子家庭は認めるが父子家庭を認めない、生活保護は女よりも男はもらいにくいなど、実際に「男は辛い」状況である。誤解しないで欲しい、日本社会は女尊男卑だといっているのではない。ただ、この社会に置いては男には女と異なり「出世する」という前提があると同時に、失敗が許されないという厳しい面もあるのではないだろうか。

……ところで、一九九九年一月二日、四年ぶりに路上でキミツと偶然ぶつかった。元気だったし、全然変りがなかった。別なドヤに住んでいた。第二大丸荘から追い出されたとき、本を全部手放したが、ギターはまだあるし、古本屋で一部二〇円で買った「現代思想」を読んでいた。二一世紀を楽しみにしていた。

参考文献

加藤祐治『現代日本における不安定就業労働者』御茶ノ水書房（改訂版）一九九一年（初版一九八〇年）

釜ヶ崎資料センター編『釜ヶ崎　歴史と現在』三一書房，一九九三年

釜共闘・山谷現闘委員会編『やられたらやりかえせ』田畑書店　一九七四年

ジョージ・オーウェル『パリ・ロンドン放浪記』小野寺健訳、一九八九年（Orwell, George: Down and Out in Paris and London, Victor Gollancz, 1933）

日本寄せ場学会発行『寄せ場』現代書館（一号—八号）一九八八－一九九五年。レンガ書房新社（九号—十二号）一九九六－一九九九年

船本州治『黙って野たれ死ぬな』レンガ書房新社、一九八五年

水野阿修羅『その日ぐらしはパラダイス』ビレッジプレス。一九九七年

宮下忠子『山谷曼荼羅』大修館、一九九六年

山岡強一　『山谷（やま）やられたらやりかえせ』現代企画室　一九九六年

Day, Sophie: "Hustling Individualism Among London Prostitutes. " In Sophie Day, Michael Stewart and Evthymios Papataxiarchis eds: Lilies of the Field: Marginal People Who Live for the Moment. Westview Press, 1999.

Gill, Tom: "Wage Hunting at the Margins of Urban Japan." In Day, Stewart and Papataxiarchis eds. Westview Press 1999.

Parker, Carleton H.: The Casual Laborer and Other Essays, Harcourt, Brace and Howe, 1920.